

チベット語ラサ方言における 動詞述語 V-ki ^ree の意味

星 泉

0. はじめに

本稿では、チベット語ラサ方言の動詞述語の一つ、V-ki ^ree (V=動詞語幹) を取り上げて、その意味について論じる。初めにこの動詞述語の「時」の側面について先行研究の記述を検証し、問題点を指摘する。次に他の動詞述語の用法との比較を通じて、この動詞述語の内奥にある意味は何かについて考察する。本稿ではこの動詞述語の肯定形のみを扱う。

1. 「時」の問題

この動詞述語（以下、述語と略す）については、これまで湯川 1964, 1971, 1975、Goldstein 1970、北村 1974、Kitamura 1977、星実千代 1981, 1985, 1988, 1991、Chang & Chang 1981、金 1979, 1983、長野 1987、胡 1989、武内 1990 などの先行研究がある。これら先行研究のほとんどが、この述語は未来の事態や現在の事態、恒常的事態などを表わすと記述している。この記述は次のような例を見る限り、確かに当てはまる。

- (1) ʔkhoran ʔsanyin ʔsöotsii la ʔpheeki ^ree.
「彼は明日お食事にいらっしゃいます」(未来)
- (2) ʔkhon ^phöökää ʔkyhenki ^ree.
「あの方はチベット語がお出来になります」(現在)
- (3) ʔnyima ʔshaa nää ʔshaaki ^ree.
「太陽は東から昇る」(恒常的事態)

しかし、星実千代 1981, 1985, 1988, 1991 (以下、星実千代 1981- と略す) が指摘しているように、この述語で発話時点から見て過去に既に実現して終わってしまった事態を表わすことがある。筆者も、この述語で過去の事態を表わす用例を数多く観察した。例えば、過去の状態、過去の繰り返された出来事、過去の習慣、過去の一回性の出来事の列挙などを表わす次のような例がある。

- (4) ʔngäämaa ^topaa ʔtöntoo ʔyako ʔkyeki ^ree.
「昔はこのあたりは作物がよく育った」星実千代 1981: 67
- (5) ʔngäämaa ʔsaca ʔtii ʔmin la ʔneton ʔrisuu ʔseki ^ree.
「昔はこの土地の名前はネトンスルといいました」星実千代 1981: 67
- (6) ʔchüncün ^kan la ^ngantsöo ʔchu la ʔkyää ʔshetraa ʔkyaaki ^ree.
「小さい頃、ぼくたちはよく川で泳いだものです」星実千代 1985: 205
- (7) ʔkhoran ʔchüncün ^kan la ʔnyäacin ʔshetraa ʔshooki ^ree.
「彼は小さい頃、しょっちゅうおねしょしてたのよ」

ーチベット語ラサ方言における動詞述語 V-ki ^ree の意味についてー

- (8) ʼkän-laa ʼthampa ʼtii ʼkapkyön ʼshettraa ʼnanki ʼree.
「亡くなった先生にはひどく叱られたものです」
- (9) ʼtanyin ʼkyheran-tsöo ʼkyhenki ʼree.
「去年（もう）あなた方はご存じでした」星実千代（私信）
- (10) ʼngäämaa ʼyinna, ʼchansa ʼkyäapo ʼshettraa ʼkyaaki ʼree.
「昔は盛大な結婚式を挙げたものです」
- (11) ʼngantso ʼchüncün ʼkan la ʼtrum ʼshettraa ʼshääree ʼtänki ʼree.
「ぼくたち小さい頃は、かわりばんこにずいぶんお話をしたものです」
- (12) ʼthinsan ʼkhoran ʼkhonää ʼphaa cää, ʼnyam ʼcheki ʼyoo ʼree ʼmatoo, ʼngäämaa ʼshingkää ʼlääka ʼcheki ʼree.
「最近では地位も上がって威張ってるけど、昔はあいつ、百姓してたんだぜ」星実千代（私信）
- (13) ʼthii ʼkap tää ʼkhoran-tsöo ʼtsa ʼsaki ʼree, ʼhankoo ki ʼkoo ʼtsöo cää ʼsaki ʼree, ʼkharää ʼsaki ʼree.
「その頃は彼らは草は食べるは靴の革を煮て食べるは、何でも食べたもんです」星実千代（私信）
- (14) ʼshää ʼtan ʼtshaana, ʼkhalaa ʼsaki ʼree. ʼani ʼkhalaa ʼsää ʼtshaana, ʼnyänpa ʼträäki ʼree.
「歌を歌い終わったら、食事をしたんです。それで食事が終わるとお礼の品が渡されたんです」（自分がかつて出席した結婚式で何が起こったかを語っている）
- さらにまた、先行研究では明確には指摘されていないが、次の例のように、仮定上の事態もこの述語で叙述される。金 1983: 11 は、「仮定」を表わすという表現は用いていないが、例文 (16) を挙げて「過去の事態も実現しなかったことならばこの述語で叙述できる」と述べている。これは仮定上の過去を表わす例文に当たる。
- (15) ʼthanta ʼkhontso ʼtää ʼyöona, ʼkapo ʼshettraa ʼcheki ʼree.
「今かれらがここにいたら、きっと大喜びですよ」
- (16) ʼthitüü ʼrhewa ʼyöo ʼmatoo ʼnga ää ʼtroki ʼree.
「その時忙しくなければ私も行きました」金 1983:11
- (17) ʼthitüü ʼpaa-laa ʼyöona, ʼngantso ʼchansa ʼkyäapo ʼshettraa ʼkyaaki ʼree.
「あの時お父さんがいたら、私達とても盛大な結婚式を挙げたのに」
- (18) ʼnamtru ʼkyön ʼshoo ʼmäana, ʼkhoran ʼkhäasa ʼhläasaa ʼleeki ʼree.
「飛行機が故障してなかったら、彼、昨日ラサに着いたのに」

以上の用例から、述語 V-ki ^ree は、未来の事態や恒常的事態、現在の事態だけでなく、過去の事態、さらに仮定上の事態をも表わせることが明らかである。この述語の表わす未来や現在、過去といった「時」は、あくまで文脈や状況の設定によって決定されるのであって、V-ki ^ree という形自体は特定の「時」を表わさない。例えば、

- (19) ʼkhoran ʼnyasha ʼsaki ʼree.
「彼は魚を食べます」

チベット語ラサ方言における動詞述語 V-ki ^ree の意味について

という例文を、文脈や状況の設定なしに取り出したら、これから魚を食べるのか、普段から魚を食べているのか、昔は食べたが今は食べないのか、もし彼がここにいたら食べるのか、いずれのことを指しているのか分らないのである。

従って、未来、現在、過去といった発話時点と事態の実現時点との時間的關係を問題とするテンスを基準にした記述は、この述語にとっては意味をなさないと言える。星実千代 1981- 以外の先行研究の記述は過去の用例が視野に入っていない点で不十分である。またいずれの先行研究もこの述語で仮定表現ができることを明確に指摘していない点是不十分である。

2. 述語 V-ki ^ree の意味

それではこの述語の意味はどのように規定できるかについて、他の述語の用法との比較を通じて考察する。

星実千代 1988: 190 は、この述語で未来の事態だけでなく現在や過去の事態も叙述できることを指摘した上で、この述語の表わす「時」の側面について次のように記述している。

「動作・状態について、それが実現するかしないかに重点をおいて述べる場合に用いられる。動作・状態が実現した後で継続するかしないかは問題とされない」

この記述の中心となる点は「実現するかしないかに重点をおいて述べる」という前半部分である。では、この述語に星実千代 (ibid.) の言うような「実現するかしないかに重点をおいて述べる」という特徴が認められるのだろうか。星実千代 (ibid.) はこの記述に至る推論過程を示していない。そこで以下、他のいくつかの述語と比較しながらこの点に関して考察したい。

2.1 述語 V-pa ^ree との比較

まず、星実千代 1981- と星泉 1993a が「事態を完了したこととして叙述するのに用いられる述語の一つ」としている述語 V-pa ^ree の用法と比較をする。述語 V-pa ^ree も、星実千代 1981- 及び星泉 1993a が示したように、過去の事態、現在、未来、仮定上のいずれの事態も叙述することができる。そこで、過去に起こった事態と現在の事態、未来の事態、仮定上の事態を二つの述語でそれぞれ叙述した場合に出る意味合いの違いを比較する。

<過去の事態>

(20a) は筆者があるチベット人女性とデリーの町を連れ立って歩いていた時、そのチベット人が道で懐かしい人に 30 年ぶりにばったり再会し、その後で筆者に、その出会った人がどういう知合いかを話してくれたときに発話されたものである。(20b) は同じことを述語 V-pa ^ree で言い替えた文である。

(20a) ʔkhoran ʔngäämaa ʔmasu-ri la ʔtääki ^ree.

(20b) ʔkhoran ʔngäämaa ʔmasu-ri la ʔtää-pa ^ree.

「彼は昔ムスリーに住んでいました」

(20b) は事態を発話時点から見て既に過ぎ去った「昔」のことを語っている感じである。これに

チベット語ラサ方言における動詞述語 V-ki ^ree の意味について

対し、(20a) は、彼女は彼に出会った途端、30年前、自分も若く、彼も若かった当時のことが思い起されて、髪も黒かった彼がムスリーにいる様や当時の思い出をまざまざと思い描きつつ語っているのであって、事態が過ぎ去ってしまったことかどうか、完了したかどうかは念頭にないのである。

(21a)はある亡命したチベット人がチベットにいた頃、どんな苦勞をしたかを筆者に綿々と語ってくれた中で発話されたものである。(21b) は同じことを述語 V-pa ^ree で言い替えた文である。

(21a) `khontsöo `topcää `hlamaa ^thinträä `ngaa teeki ^ree.

(21b) `khontsöo `topcää `hlamaa ^thinträä `ngaa tee-pa ^ree.

「あの人は食べ物の余りなんかをあたしにくれたのよ」

(21b) は、「余りなんかをくれた」という事態が、発話時点から見て既に過ぎ去った「昔」のこととして捉えられているのに対し、(21a) は苦しかった時代のことを綿々と語っているうちに、その当時の記憶がまざまざと蘇ってきて、過去のその時、その場に身を置くようにして語っている、という感じであり、もう終わったことだとか、完了したことだということは、話し手の念頭にないのである。

<現在の事態>

次は、家の門が遠くに見えてきて、もうすぐ家に着くというときに発話され得る二つの文である。

(22a) `tha `ngantso `nan la leeki ^ree.

(22b) `tha `ngantso `nan la lee-pa ^ree.

「さあ、私達は家に着きますよ／着きましたよ」

(22b) は門が見えるところまで来たのだから、家に着いたも同然だという、もう済んでしまった、完了したという気持ちで発話されたものであるのに対し、(22a) はこれからもう少し歩けば家に着く、ということを述べているだけで、完了感のない述べ方である。

<未来の事態>

次の例文は、話し手が自分の馬をある人に明日貸すという状況で発話され得る二つの文である。

(23a) `ngantsöo `ta ti `sanyin `khoran la yaaki ^ree.

(23b) `ngantsöo `ta ti `sanyin `khoran la yaa-pa ^ree.

「うちの馬は明日彼に貸すんです」

(23b) は「明日馬を貸す」という約束が既に成立し、もう契約は完了したのだという気持ちで叙述しているのに対し、(23a) はただ「明日馬を貸す」という予定だと言っているだけであって、約束が成立したのだというような完了の意味合いはない。

<仮定上の事態>

次の例文のうち、(24b) は、あるチベット人がダライ・ラマに申し上げたという文であり、(24a) は同じことを述語 V-ki ^ree で言い替えたものである。

チベット語ラサ方言における動詞述語 V-ki ^ree の意味について

(24a) 'thanta `kusuu la `cik 'chunna, ^phöö 'nakun `chaaki ^ree.

(24b) 'thanta `kusuu la `cik 'chunna, ^phöö 'nakun `chaa-pa ^ree.

「今ダライ・ラマのお身体に何事かあったら、チベットは真っ暗闇になってしまいます」
(24b) は「ダライ・ラマのお身体に既に何事か起こってしまった」ことを想定して、そうなったら「チベットは真っ暗闇になったも同然だ」と、事態がもう完了したも同じだという気持ちで叙述しているのに対し、(24a) はただ「何事か起れば真っ暗になるだろう」と予測しているだけであって、完了したも同じかどうかということは話し手の念頭にはない。

このように、述語 V-pa ^ree で叙述した場合には事態が既に過ぎ去ってしまったことであったり、既に現実化したということや、決定した、完了したも同じだというような、完了の意味合いが強く出るのに対し、述語 V-ki ^ree で叙述した場合には完了したかどうかにはまったく言及していない述べ方になるということが分かる。

従って、述語 V-pa ^ree との比較から、述語 V-ki ^ree は事態が完了したかどうかということを念頭に置かずに叙述するという特徴を持った述語であるということが分かった。

2.2 述語 V-ki ^yoo ^ree 及び V-ki ^tuu との比較

次に、星実千代 1981- と星泉 1993b が「事態が完了せずに継続している状態（進行中、習慣・反復、状態、準備中など）」を表わす述語としている述語 V-ki ^yoo ^ree と V-ki ^tuu の用例と V-ki ^ree の用例を比較する。

比較に入る前に、述語 V-ki ^yoo ^ree と V-ki ^tuu の相違についてここで簡単に述べておく。V-ki ^yoo ^ree は「叙述する事態を話し手が観察・経験しているか否かを問題にせずに、話し手が発話時点において心理的、時間的、空間的に遠く感じている事態を叙述するのに用いられる」述語であるのに対し、V-ki ^tuu は「叙述する事態を話し手が確実な方法によって観察・経験し、それを話し手が観察・経験した範囲の出来事として語る」述語である（星泉 1993b: 435-440）。

<述語 V-ki ^yoo ^ree との比較>

例文 (25a) (25b) は、先述の例文 (20a) (20b) と同じ状況設定での二つの発話である。

(25a) `khoran `ngäämaa 'masu-ri la 'tääki ^ree.

(25b) `khoran `ngäämaa 'masu-ri la 'tääki ^yoo ^ree.

「彼は昔ムスリーに住んでいました」

(25b) は、話し手は、自分の知っている限りでは彼はある一定の間暫くムスリーに住んでいたことがあり、彼に対して心理的、空間的、時間的に遠いと思いながら語っているという感じになるのに対し、(25a) は、単に話し手は彼が当時ムスリーに住んでいたかいないかということを問題にして、「住んでいた」という事実が成立するということだけを断定して語っている。

次の二つの文は、どちらもチベットでは夏に雨がよく降るということを思い浮かべて語っているものである。どちらの場合も話し手はチベットの外にいるという設定である。

(26a) ^thatsöö ^phöö la `chaapa `tanki ^ree.

(26b) ^thatsöö ^phöö la `chaapa `tanki ^yoo ^ree.

ーチベット語ラサ方言における動詞述語 V-ki ^ree の意味についてー

「チベットではいまごろ雨が降ります／降っています」

(26b) は、話し手は、自分はチベットを離れているが、知っている限りでは、この季節になると毎日よく雨が降り続くのだ、という意味合いで、繰返し雨が降り続いている状態を思い描きながら語っているのに対し、(26a) は「いまごろの季節は雨が降るものである」という意味で、夏には雨が降るのだという判断を示しているのであって、降り続いている状態にあるかどうかは、考慮していない表現である。つまり、(26a) は降るのか降らないのかということを問題にして、「夏には降る」という事態が成り立つということだけを断定して語っていると解釈できる。

次の文は、ある二人がもうじき結婚する予定であるという状況で発話され得る二つの文である。

(27a) 'khonyii 'kyoko 'chansa 'kyaaki ^ree.

(27b) 'khonyii 'kyoko 'chansa 'kyaaki ^yoo ^ree.

「二人はじき結婚します」

(27b) は「二人が結婚する」ということは決っていて、現在その準備段階の状態にある（婚約式をして、結婚式の準備を整えるなどの）ということを他人から聞き知って語っているのに対し、(27a) は準備段階にあるかどうかとか、それを他人から聞き知ったことであるなどということは念頭になく、とにかく「二人がじき結婚する」という事態が成り立つということだけを問題にし、それがとにかく成り立つのであるということだけを断定して語っている。

<述語 V-ki ^tuu との比較>

例文 (28a) (28b) は、対話の相手が嘘をついたという状況で、これに対して、「お前また嘘をついたな」と言い返すという場面での二つの発話である。

(28a) 'yan 'kyaktsin 'shääki ^ree.

(28b) 'yan 'kyaktsin 'shääki ^tuu.

「また嘘つく／嘘ついでる」

(28b) は、相手が目の前で嘘を言っているという今の状態を描写した発話であるのに対し、(28a) は、確かに相手がたった今、目の前でついた嘘について言及しているのではあるが、それと同時に「お前は前から嘘ばかりついて、今もまたついて、これからは嘘つきなのは直らないだろうし、お前は本当に嘘つき人間だ」と相手が嘘をつくような類の人間であるということも述べている。つまり (28a) は、「相手の人が嘘をつく」という事態が成り立つかどうかだけに注目して、本当は「嘘をつかないこともある」はずなのにそうした側面は捨象して、とにかく「お前は嘘をつく」と決めつけて語っているのである。

さて、以上の比較から、述語 V-ki ^ree を用いるときは、述語 V-ki ^yoo ^ree や述語 V-ki ^tuu を用いるときのように、話し手は叙述する事態を、それが存在または存続しているという側面で捉えてはいないということが分かる。また、述語 V-ki ^tuu との比較から、述語 V-ki ^ree には、叙述する事態を話し手が確実な方法によって観察・経験し、その事態の在り方を描写して語るといった意味がないことも分かる。従って、述語 V-ki ^ree は、叙述する事態を、成り立つかどうかという側面だけで捉え、それがとにかく「成り立つ」のであるという断定判断を下したことを示すための述語であると言えるであろう。

ーチベット語ラサ方言における動詞述語 V-ki ^ree の意味についてー

この記述は星実千代1988: 190の「実現するかしないかに重点をおいて述べる」という記述に近いが、恒常的事態や習慣行為などは「実現」という表現よりも「成り立つ」という表現の方が適切であると考えるので、筆者は「成り立つ」という表現を用いる。

2.3 述語 V-ki ^ree の意味の規定

2.1 及び 2.2 で明らかになったこの述語の特徴は次の四点に整理できる。

<1> 叙述する事態がすでに完了したかどうかを問わない。

<2> 叙述する事態がある状態で存在・存続しているという側面には注目しない。

<3> 話し手が叙述する事態を確実な方法で観察・経験したかどうかを問題にしない。

<4> 叙述する事態が成り立つか否かのみを問題にし、それが「成り立つ」という断定判断を示す。

<1><2><3>はいずれも他の述語との比較から引き出された特徴であり、これらは全て<4>といういわば述語 V-ki ^ree の中核的な特徴が、他の述語と比較した際に異なる形で表れたものと解釈できる。従って、述語 V-ki ^ree の意味としては<4>のみを挙げればよく、次のように規定することができる。

「述語 V-ki ^ree は、ある事態が成り立つか否かという点のみに注目し、その事態が成り立つという断定判断を示すための述語である」

3. おわりに

本稿では、述語 V-ki ^ree に関する先行研究の問題点、特にテンスを基準にした記述が意味をなさないことを明らかにすることができた。そして述語 V-ki ^ree の意味を、他の三つの述語との違いを観察しながら考察した。2.3 で得られた意味の規定は星実千代1988: 190の規定とほぼ同じものとなったが、本稿では他の述語と比較することによって、この意味規定に至る過程を示すことができたと思う。

しかしながら、この述語の意味をさらに厳密に規定するためには、「話し手の積極的かつ主体的な意志表明」を表わす述語 V-ki ^yin との比較が不可欠である。そのことについては、近く稿を改めて発表したい。

註

本稿は第41回日本西藏学会大会において筆者が口頭発表したものをまとめたものである。

本稿の例文は、特に註記がなければ、筆者が、チベット・ラサ出身でインド在住のリンチェン・ドマ・タリン氏、ベティ・タリン氏をはじめとするタリン家の方々、及びラサ近郊の出身で東洋文庫チベット研究室外国人研究員のゲシェ・テンバ・ゲンツェン師から得たものである。星実千代（私信）と記したものは、星実千代氏がラサ方言の話し手から収集した口語資料による。

謝辞

本稿をまとめるに当っては、資料収集の段階で、リンチェン・ドマ・タリン氏、ベティ・タリン氏

チベット語ラサ方言における動詞述語 V-ki ^ree の意味について

をはじめとするタリン家の方々及びテンバ・ゲンツェン師に大変お世話になった。論文執筆の段階では、指導教官の湯川恭敏先生をはじめとする東京大学言語学研究室の諸先生方、先輩、友人の方々には貴重な助言を頂いた。また、星実千代先生には、この論文執筆の過程で様々な資料を提供して頂いた他、終始御指導、御教示頂いた。こうした全ての方々に対し、深い感謝の意を表するものである。

音素表記・声調表記

子音：/ p, ph, m; t, th, n; tr, trh; c, ch, ny; ts, tsh; ky, kyh; k, kh, ng, s, sh; w, y; r, hr; l, hl; h / 母音：/ a, i, u, e, o, ä, ü, ö /

声調表記：ˊ: 高平調、ˋ: 高降調、ˊˋ: 低昇調、ˊˋˊ: 低昇降調、- (または無記) : 軽声

本稿で挙げた例文は全てこの表記方法に統一し、先行研究から引用した例文も筆者の表記法に改めた。この表記方法はタリン家の発音を基にしている。

参考文献

- CHANG, Betty Shefts and Kun CHANG (1981). "Perfective and Imperfective in Spoken Tibetan". 史語研集刊 52-2 台北.
- GOLDSTEIN, M. C. and N. L. NORNANG (1970). *Modern Spoken Tibetan: Lhasa Dialect* Kathmandu, Ratna Pustak Bhandar. 1984 (3)
- 星 泉 (1993a) 「現代チベット語ラサ方言の動詞述語と『時』の問題」第106回日本言語学会大会発表資料
- (1993b) 「チベット語ラサ方言の非完了・継続状態を表わす動詞述語について」『東京大学言語学論集』13 pp. 415-446 東京大学文学部 言語学研究室
- (1994) 「現代チベット語ラサ方言における動詞述語の考察」東京大学修士論文
- 星実千代 (1985) 『現代チベット語文法 (ラサ方言)』東京 ユネスコ東アジア文化研究センター
- (1988) 『現代チベット語文法 (ラサ方言)』東京 ユネスコ東アジア文化研究センター
- (1991) 『エクスプレス チベット語』東京 白水社
- 胡 坦 他編 (1989) 『拉薩口語読本』北京 民族出版社
- 金 鵬 (1979) 「論藏語拉薩口語動詞的特点与語法結構的關係」『民族語文』3, pp. 173-187
- (1983) 「藏語拉薩話動詞的式及其表達方法」『民族語文』1, pp. 169-221 北京.
- 北村甫 (1974) 『チベット語の会話』(昭和49年度言語研修テキスト) 東京 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (ILCAA).
- KITAMURA, H. (1977) *Tibetan (Lhasa Dialect)* アジア・アフリカ文法便覧 No. 12z. 東京 ILCAA.
- 北村甫・星実千代 (述語の部分は星実千代の記述。本稿では星実千代1981と略記) (1981) 『現代チベット語文法 (ラサ方言)』東京 ユネスコ東アジア文化研究センター
- 長野泰彦 (1987) 「現代チベット語の文法的特徴」：長野・立川編 (1987) 『北村甫教授退官記念論文集 チベットの言語と文化』東京 冬樹社 pp. 204-247
- 武内紹人 (1990) 「チベット語の述部における助動詞の機能とその発達過程」『アジアの諸言語と一般言語学』pp. 6-16 東京 三省堂
- 湯川恭敏 (1964) 「チベット語文法」東京大学修士論文
- (1971) 「チベット語の述語の輪郭」『言語学の基本問題』第7章 pp. 178-204 東京 大修館書店
- (1975) 「チベット語の述語」『アジア・アフリカ言語研究4』pp. 1-14 東京 ILCAA.